

彗星だより

1928年 a 彗星 本年最初の彗星はハイデルベルヒのラインムート氏によつて発見せられた。その2月22日萬國時23時4.7分に於ける位置は次の通りで

赤徑 $9^h 15^m 7.5$ 赤緯 $+21^\circ 44' 55''$ (1928.0)

日運動は夫々 $-20^\circ, +7'$ であることが報ぜられた。當時の光級は $12.^m 5$ であつた。本年の彗星発見は昨年 of プラスワイト又一昨年 of バードなぎに比べると餘程をそかつた譯である。其後方々の観測があるが、クロンメリン氏は発見前の1月29日の寫眞位置、2月22日及び25日の観測から次の様な橢圓軌道を算出した。

近日點通過時	T	1928年2月1.650萬國時	
近日點引數	ω	$9^\circ 26' 37''$	} 1928.0
昇交點黃徑	Ω	124 53 11	
傾斜角	i	8 0 16	
離心角	φ	30 2 13	
近日距離の對數	Log q	0.268589	
周期		7.16411年	

アメリカ、パークレイ天文臺のバーマン、ホイブル兩氏が算出した略算の軌道要素も大體に於て似てゐる。

1928 b 彗星 4月16日着の國際天文同盟回報によるゴジャコビニ氏が新彗星を発見した由である。即ち3月17日発見で萬國時22時14.0分に於ける位置は赤經 $5^h 50^m 0^s$ 赤緯 $+14^\circ 35'$ で暫くの間見えた丈で再び観測し得ないから、その運動もしかもわからないけれども赤緯が著しく減じてゐたといふことである。當時の光級は11.0等級だつた。

彗星の名稱 前回の彗星だよりの1927 k 彗星の紹介のところで當然述べる筈であつたのはこの彗星の呼び方に關してである。彗星の一般的な記號方法は、先づその軌道を研究した上でその近日點通過の時日の順序に並べ

るさ、幾つかの彗星が一つの暦年の中に含まれることになるであらう。その順序をローマ数字で表はしたものを年の次に書き加へて彗星の名稱さするるのである。1925 I, 2926 II…さいつた様なものである。しかし乍ら彗星は近日點通過の順序には無關係に發見せられるささだから、この様な記號をつけるためにはその年の終るまで待たねばならない。或はその後に發見せられたものでも尙ほ早く近日點を通過したものもあるから餘程後まで待たねば決定的な記號を與へられぬ譯である。そんなささでは彗星の名稱さしては甚だ迂遠なささころから彗星に限つて別にその發見者の名前で呼ばれるのである。

この發見者の名前で呼ぶささは大層親しみ易い、良い名付け法ではあるが彗星發見をする人は殆んど専門的に引續いて多くの彗星を發見してそれが爲めに同一の名前では甚だしく紛らはしい場合が屢合出てくるのである。それで最も簡單な方法さしてその一年中で最初に發見せられたものから順序に a,b,c,…… さいふ假りの名前がつけられてるるのである。このささは恐らく多くの讀者は承知のさささ考へる。

こゝで問題さなるのは a,b,c,…… さいふ規約である。さいふのは獨逸では、尙詳しく申せばドイツの天文彙報（アストロノミツシエ・ナハリヒテン）では a,b,c,d,e,f,g,h,i,k,l, の順序をさり英國流では即ちクロンメリン老一派の人人では a,b,c,d,e,f,g,h,i,k,…… の文字を採用してるさささである。その依つて來るささころを考ふるに、もさもさ獨逸では J は半母音で I さ紛れ易い心配があるので順序を示す場合に片方を除外した例が多いのである。例へば獨逸の計算局（Rechen-Institut）では小遊星の暫定記號さして大文字のアルファベットを使用するがその場合に I を除外して J のみを使用してる。即ち一つの例を舉げれば 1902HZ Genua の次に發見せられたのは 1902 IA でなくて 1902 JA さなつてる様なものである。しかるに又同じく獨逸の天文協會（Astronomische Gesellschaft）ではその四半年報（Vierterjahresschrift）に發表する變光星の名稱さして同じく A,B,C を使用するがこれには I を用ひて J を用ゐない。この様な國柄では彗星の記號に i のみを用ゐて j を用ゐないささも幾分首肯さうるのであるが英國流

に j のみを使用するここは一寸合點のゆかぬところである。只一つ獨逸側この調和さいふ點にあるならば潔ぎよく j をすてて i を採用すべきであると思ふのである。昨年1927中第九番目に発見のシュワスマン・ワハマン彗星の報導に際して英國のマーソン氏は B.A.A 回報中に「この彗星は1927 j とすべきもので、習慣上 i は用ゐないことになつてゐる」と斷り書きがしてあるが、實に憐むべき習慣である。

もともと、この様な問題は一年中に発見の彗星が9つ或は10以上に達した場合に起るこゝ柄であるが昔は左程多くの彗星は毎年発見せられなかつた。開闢以來初めてそんな多數の彗星の発見があつたのは1898年でペラインが彗星発見のため氣張つてゐた頃の所産である。

さてその年の記號の付けぶりを調べて見るに、獨逸の天文彙報ではその年まで a, b, c の名前は付けずに只発見者の名前で呼んでゐたのであるが、この年のそんな多數の発見に驚いて発見電報の中央局長であり又彙報出版者であるキールのクロイツ臺長は今後即ち1899年以向は前に定めてあつた通りに（それは同彙報の第101巻に出てゐるこのことだが、當天文臺にないため未調査である） a, b, c, \dots の暫定名稱を付けることを申出してゐるのである。それは1898年11月28日附になつてゐる。

ところが英國ではさうかと思ふに、英國天文協會(B.A.A.)ではその機關雜誌に「1898年10月20日ブルツクスによつて大彗星(i 1898)発見せらる」と立派に i 文字を使つてゐる其上次に11月14日チエーズによつて発見せられた彗星には j 1898 の名前を與えてゐるのである。一方アメリカの通俗天文誌 (Popular Astronomy) も a, b, c, \dots, i, j の名前を歴然とつけてゐるのを見出すのである。

この曠古の彗星の豊年は大した問題にならず過ぎ去つて終つて、再び珍しい彗星年1925年が来るまで世紀の三分の一を經過したのである。

1925年の多數の彗星発見は今も耳新しいところと思はれるが、此年以來名前の付け方が別別に定まつた様である。ドイツの天文彙報では $a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l$ の11文字を使用してゐるに對して、英、米では i を j に置き換へてゐるのである。これが所謂習慣なのであつて再び昨年1927年の場合に

同様に用ゐられたのである。

さて日本に於ける習慣はさうであらうか。遺憾ながら貴ぶべき傳統を持ち合はさないのであるから、1925年の時には彗星発見の通知がある毎に a,b,c,……, をいろは同様に心得て一つ一つに配當したのである。即ち…… h,i,j,k,l までがつて最後の帳尻はうまく合つてゐた。さいふのはバラバシエフさいふ彗星が一つ割り込んでゐたが爲めである。このバラバシエフ彗星はロシア、カルコフのバラバシエフ教授が1925年10月9日に発見したもので、ラヂオで放送されたものが日本に傳へられたのである。それで我々はこれを1925h 彗星の名前を與へてすましてゐたのである。しかし生憎この彗星は他では発見せられなかつたので、次に10月20日バーデによつて発見せられたファイユ彗星に h 記號を譲つて終つたものである。尤もバラバエフ教授の云ふには最初寫眞で 5.^m5 位のものとして発見したので直に望遠鏡でこれを檢し且つ幾人かに見せたさいふのである。雙眼鏡でも又肉眼でも後に見たさいふのだから勿論幻影でないことは事實であるがその後の觀測がないために彗星であるさいふこそが確かめられないのである。さいつて直ぐ h の記號をお次へ順送りするのも一寸解し難いところである。これが彗星でないこと決まれば h を抹殺すればいい丈の話で今までにもその例はある。例へば1908年 a 彗星は Amherstia さいふ小遊星を間違へてゐたので、事實上 a 彗星であるべきウドゲートの発見したエンク彗星は1908b になつてゐる様なものである。

尤も今年の a 彗星の如く、フリボフ氏が間違ひで取り消した以上はこんど発見せられた彗星ラインムートに名前を譲るべきであることは勿論の話である。

それは兎も角もして、今後彗星の発見は増加しても減する筈もないのだから屢屢 i ぞ j ぞの別々な用ひ方が繰り返へさるものを見なければならぬ。この様な問題は國際天文同盟 (International Astronomical Union) に提出して決定すべきものであらう。そして別段 i ぞ j ぞがそれ程間違ひ易いものとも思へぬから、…… h,i,j,k,l,m…… ぞ使用する様にすれば雙方の顔を立てるさいふものであらう。(1928 4 20上田)